

## 論文の内容の要旨

論文題目      アリストテレスの倫理思想における快樂と苦痛  
                    ——「二つの快樂論」から〈共生の完全化〉へ——

氏 名          加 藤 喜 市

### i. 主題と目的

本論文は古代ギリシアの哲学者アリストテレス (B.C. 384-322) の倫理思想を扱う。主題となるのは「快樂 *ἡδονή*」, そして「苦痛 *λύπη*」という二つの概念である。紀元前1世紀, ロドスのアンドロニコスにより編纂されて現在にまで伝わる「アリストテレス著作集 *Corpus Aristotelicum*」のうち, 一般に倫理的著作とされているのは, (偽作とされる『大道德学』(MM) を除くと) 『ニコマコス倫理学』(EN)・『エウデモス倫理学』(EE) の二書である。これらの著作の快苦について論じているテキスト箇所を主な手がかりとして, 本論文ではアリストテレス倫理学における「快樂」・「苦痛」両概念の解明を試みる。

(1) アリストテレスは倫理学において「快樂」と「苦痛」をどのようなものとして捉えていたのか, また (2) それらの概念の哲学／倫理的意義をどこに見い出していたのか。本論文がその全体を通じて目指すのは, アリストテレス倫理学における快苦の「理論 *theory*」と「実践 *practice*」の検討である。

## ii. 本論文の特徴：「弁証的問答法」と〈快苦の対称性〉

現在に至るまで影響力の大きい先行研究——Owenの「アリストテレスの快樂論」や Burnyeatの「アリストテレスと善き人への学び」、あるいは Gosling-Taylorの『ギリシア人の快樂論』といった古典的研究に対して、本論文の有する主な特徴は以下の2点である。(1) 快苦をめぐるアリストテレスの議論を、さまざまな先行学説との間に成り立つ「弁証的問答法 *διαλεκτική*」の実践として読むことで、アリストテレス倫理学を可能な限り〈生きられた思想〉として再構成すべく努める点。(2) 快樂論内外のテキストにおける「苦痛」に関する論述に着目して、〈快苦の対称性〉という観点をアリストテレス倫理学に強く読み込む点。前者については Warren・Aufderheide、後者については Frede・Curzer といった近年の論者の研究を踏まえつつ、本論文はこれらの批判的検討を通して、アリストテレスの快苦理論についてのより包括的な解明を目指すものである。

(1) アリストテレス倫理学における「二つの快樂論」に関しては、EN第7巻(=EE第6巻)の快樂論AよりもEN第10巻の快樂論Bが重視される傾向にある。これは、快樂論Aの強い論争的な性格に対して、快樂論B(とりわけ第4章と第5章)では、アリストテレス自身の積極的見解が語られていると目されるからである。従来の研究の多くは、これらの箇所集中している。だが、本論文では敢えてアリストテレスによる先行研究の検討——いわゆる「エンドクサ」の検討という側面にも着目する。先行学説の精査は、本論文序章で論じるように、アリストテレスに見られる方法論的特徴である。本論文においては、師であるプラトンを筆頭に、エウドクソスやスペウシポスといった同時代人の快樂説への応答を通して語られるアリストテレス自身の思考の動態を捉えるべく努めるという方針を採る。

(2) ENの「快樂論」と呼び習わされるテキスト箇所を読む者は、なぜ苦痛についての記述が殆ど見当たらないのか、不思議に思うかもしれない。たしかに、『弁論術』第1巻における「苦痛」概念についての素っ気ない取り扱いからすると、倫理学においてもアリストテレスのまなざしが、まずもって快樂のほうに注がれていた可能性は否定できない。また、「身体的苦痛」そのものに何らかの意義を認めることは難しいかもしれない。「幸福な生」との関わりにおいて、苦痛は否定的な役割を果たすだけでも思われるからである。だが、いくら「幸福」を主題とするとはいえ、快樂についてのみ語るのだとすれば、アリストテレスの倫理思想はあまりに楽天的に過ぎるのであり、倫理学理論としても不十分であるだろう。アリストテレス自身も二つの快樂論の前置きにおいて、徳・悪徳は「苦痛と快樂に関わる」のであり、「然るべきものを喜び、然るべきものを嫌うこと」が重要だと語っている。本論文では主として快樂論以外のテキスト箇所——徳論、無抑制論、幸福論、友愛論などから、アリストテレス倫理学における「苦痛」の意義についても併せて考察する。

### iii. 本論文の構成

#### 【序章 方法論】

第一部に先立ち、アリストテレス倫理学の方法論的特徴について、「エンドクサの手法」と「弁証的問答法」という2点から考察する。広義において〈先行学説の検討〉として——先行学説とアリストテレスとの間で交わされる〈対話の技術〉としても捉えられる後者の方法は、快樂論 A・B においてとりわけ顕著に見られるが、本論文第二部以降で検討することになるアリストテレス倫理学のさまざまな議論にも同様に認められるものである。

#### 【第一部 快樂論】

本論文の第一部は、アリストテレス倫理学の中で快樂と苦痛を主題としたテキスト箇所、快樂論の解釈で構成される。考察対象となるのは、EN 第7巻 (=EE 第6巻) 第11-14章 (快樂論 A) と第10巻第1-5章 (快樂論 B) である。

第1章では、主に快樂論 A を取り上げる。関連するプラトン『ピレボス』の論点を確認したのち、EN 第7巻 (=EE 第6巻) 第12章の議論を分析することで、「妨げられない」「自然本性に即した性向の現実活動」というアリストテレスの快樂概念が「生成過程」とどのような関係にあるのか、Bostock・Aufderheide の論考を手がかりに読み解く。

続く第2章では、アリストテレス自身の積極的主張と目される EN 第10巻第4・5章に焦点を当てて、快樂論 B のテキスト解釈が示される。まず、〈運動の不完全性〉との対比で示される〈快樂の完全性〉の論点を確認したあと、第10巻第4章後半で語られる「二つの完全化」に関するテキストから、B におけるアリストテレスの快樂概念をあきらかにする。

第3章では、快樂と「最高善」との関係という切り口で、快樂論 A と快樂論 B の違いを強調する読み筋が示される。「衝撃的主張」に関する Rapp の議論とエウドクソス・スペウシッポスの議論に関する Warren の論考を参照しつつテキストを辿っていき、快樂論 A・B それぞれにおけるアリストテレスの「快樂主義」に対する立場を確認する。

第3章での本文読解を踏まえて、第一部附論として、改めて快樂論 A・B の関係を論じる。A・B における快樂概念の齟齬という「二つの快樂論」問題に対する解釈史 (統一的解釈・Owen の解釈・発展史的解釈) を瞥見したのち、この問題に関する本論文の立場が示される。

#### 【第二部 徳論・幸福論・友愛論】

本論文の第二部以降では、アリストテレス倫理学において、快樂論以外で快苦を論じている箇所を主として取り上げる。これらは、アリストテレスの快樂理論の謂わば「応用編」として位置づけられる。

第4章の考察対象となるのは、EN第2巻の徳論と第7巻の無抑制論である。ここでは、性向形成における快苦の役割という Burnyeat の論文「アリストテレスと善き人への学び」で提起された問題を扱う。Burnyeat の立場と彼を批判的に検討している Curzer の立場とを比較しつつ、Curzer とは異なる仕方でもアリストテレス倫理学における「苦痛」概念の意義を探る。

本論文の最終第5章では、「他者」と「共に生きる *συζήν*」という人間存在のあり方に考察の眼を向けることにより、古代ギリシアに生きたアリストテレスの思想が有する、現代の私たちにも通ずる普遍的意義をとり出すことが試みられる。快樂が「生きること」を完全にするという〈生の完全化〉の論点を、友愛論における「自己知覚」・「他者知覚」の問題と結びつけることで、アリストテレスの倫理思想における快苦の意義を〈共生の完全化〉の内に見定める。

#### iv. 結論

第一部では、快樂論のテキスト解釈から以下の結論を得た。(1) アリストテレスは快樂論 A において、プラトン『ピレボス』の「快樂=生成」論に応答しており、その際を中心となるのが、快樂概念についての「生成過程」から「現実活動」への読み替えである。(2) 快樂論 B で、アリストテレスは快樂を「完全性」・「完全化」という概念を用いて説明している。とりわけ解釈上の争点となる〈快樂による完全化〉については、「華やぎの比喩」の解釈から、快樂が「付随する何らかの目的 *τέλος*」として活動を完全化するという読みが示された。(3) 快樂論 A・B の間の差異として、本論文はまず快樂と「最高善」の関係性に着目した。快樂論 A には快樂と最高善を同一視するような「衝撃的主張」が見られるのに対して、快樂論 B のアリストテレスはエウドクソスの議論に寄り添いつつも、最終的には「快樂主義」と決別している。

快樂概念の齟齬という「二つの快樂論」問題に関して、第一部附論における本論文のひとまずの結論として、アリストテレスが快樂論 A から快樂論 B へと自説を修正したという「発展史的解釈」へ行き着いた。それと同時に「統一的／発展史的」というこれまでの枠組みを乗り越えて、本論文第一部で試みられたように、アリストテレスの倫理学を「弁証的問答法」の実践として読み解き、一種の〈生きられた思想〉として捉える解釈の可能性が論じられた。

第二部の結論は以下の通りである。(4) アリストテレスの語る「善き人への学び」において、快苦はどちらか一方だけでなく、双方が重要な役割を果たしている。とりわけ苦痛に関しては、道徳的前進をもたらす契機としての意義が、無抑制論における「後悔」や〈内的葛藤〉の論点のうちに認められる。(5) 友という「他者」の存在を知覚して、彼らと共に楽しみ共に悲しむことは、「本性的にポリスに生きる」人間存在にとって「共生」（言葉と思考の共有）において実現する。この文脈において、快樂による〈生の完全化〉は〈共生の完全化〉へと変ずるのであり、アリストテレスの倫理思想における快苦の意義はここに窮まると考えられる。